

# 激動の経営

## 活気ある時代

ブロンドの髪に真っ白な肌、ブルーの瞳。人形のようにきれいな米国少女が、吉田博少年の頬にキスをした。小学6年生の時に横浜で参加した米軍基地交歓会のことだ。他校

### 富士電工

①

の生徒だった名も知らぬ少女との淡い思い出だが、異文化との接触は博の「いつか米国に行く」という思いにつながり、後の海外展開にいきていく。

博の父である三郎は1951年3月3日、マグネットワイヤを扱う巻き線問屋「富士電工」を創業した。場所は東京・芝の大門通り。近辺には東京芝浦電気（現東芝）や日本電気などの電機メーカーや化学品・ゴムメーカーが集積していた。博は「子どもながら、町を

## 米国への憧れ



▲巻き線問屋として創業（右端の店舗、1952年）芝浦大門通りで撮影。富士電工提供

歩くと企業の大小に関係なく活気を感じた時代だった」と話す。三郎は起業前に富士電機製造（現富士電機）の川崎工場に勤務

し、古河電気工業から巻き線を仕入れる仕事をしていた。戦前から縁のある古河電工や富士電機の商売の邪魔にならないよう、大手は

## 異国での経験、経営に生きる

い。富士電工は着々と成長していった。

### 大学留学

その間も米国への憧れを抱き続けた大学1年生の博は、父に「留学したい。将来は富士電工に入社するから」と訴えた。父の返事は「落第せず卒業できた」と乗り気ではない様子だったが、博は無事に大学を卒業。晴れて米国の語学学校で学び始めた。半年の学習期間を終えると、周囲の友人は「大学に行く」という。

ならば自分も、と父に言う。「やれるだけやってみな」と応援し

てくれた。博は米ペパーダイン大学に入学し、勉強に励んだ。

### 異国の地では、後に社長となる富士電工の経営に生きる経験が多かったという。大学で努力しながらも教養科目を落とし卒業が危ぶまれる事態になった際、悩んだ博は友人たちのアドバイスに従い、学部長に卒業を直訴することにした。

「君は将来どうしたいのか」。学部長の問いに博は、父が営む電線問屋で英語やマーケティングの知識を生かしたいと話した。「よし、ならば取引

よう」と学部長は、卒業単位を取得する代替手段を提示してくれた。必死に取り組み、無事に卒業が決まった。「日本の大学ではあり得ないことだよ」と振り返る。

「しかるべき人に会うことは意味がある」。博は経営のターニングポイントでさまざまな人に出会い、富士電工の未来を切り開いていくことになる。

### 人との出会い

（敬称略）

▽所在地 東京都港区芝大門2の11の1▽代表者 吉田博氏▽創立 1951年（昭26）▽資本金 1億円▽従業員 60人▽売上高 68億円（22年3月期）